フェヌロンの『アカデミー入会演説』[1)]

柳　　光　子（訳註）

アカデミー-フランセーズの会員諸氏により，国務院調査官であられた故ペリッソン氏の座を継ぐ新会員として選出されたフェヌロン師は，1693年3月31日に参会，以下の演説を行なった[2)]。

会員の皆様，本日，皆様から私が授かりました名誉に御礼申し上げますためにも，本会から失われたかくも尊敬すべき人物の埋め合わせを致しますためにも，ペリッソン氏の席とともにその雄弁の才を，私は継承しなければなるまいと存じます[3)]。

ペリッソン氏は幼少のみぎりよりホメロスを通して，そのほぼ全てを翻訳することにより，ごくごく些細な描写のなかにも生命と優美さとを宿らせる術を学ばれました。ほどなく同氏は法律学に関する著作を物されましたが，それは完結していないという欠点のほかにはいかなる欠点をも認められぬ出来映えでありました。さほどまで見事な習作によって，おのれの傑作と目されるものに到達せんものとペリッソン氏は道を急がれたのであります。その傑作と申しますのが，かの『アカデミーの歴史』であります[4)]。この著作にはペリッソン氏の人となりがよく現れております。すなわち流暢さ，創作の才，典雅，ほのめかしの技巧，的確さ，達人の業。ペリッソン氏がホラチウスのごとくに語らん

ものと励まれたのは幸いなことでありました。その手はあらゆるところから華を生ぜしめました。彼の手が触れたものは，ことごとく麗しい姿へと変貌をとげたのであります。まこと取るに足りぬ野の草々からさえ，ペリッソン氏は英雄たちに相応しい冠をしつらえる術を心得ておられました。美しく装わせることができるものにしか手を出してはならぬという，余人には必須の戒めも，ペリッソン氏には無用のものと見受けられました。その高雅にして軽妙なる文体は，神話の神々が地に足を置くことなしに天翔ける，その足取りを思わせるものでした。皆様のほうが私以上によくご存知のことでございましょうが，ペリッソン氏が口を開かれるときには，選び抜かれた表現を，えも言わず耳に快い多彩な言葉の綾を，比類なく的確にして斬新なる言い回しを，それもごくありふれた物ごとを話題としておられる時にさえ，駆使しておられたものでした。溢れんばかりの巧知をもって話を紡ぎ合わせ，技の限りを尽くして読者に時空を越えさせ，描かれる出来事に立ち会うかの思いへと誘われたため，その語り口の織りなす生地の心地よさに包まれて，読む者は忘我の境に至るのが常でありました。

皆こぞってペリッソン氏の筆によるアカデミー誕生の経緯を喜んで読みました。読んでおります間というもの，読者ひとりひとりが，アカデミーの揺籃のごとき場であったコンラール氏の館に，あたかも自ら居合せたかのように感じたものです。誰もが読み知ることに興じました。初期に重ねられた会合が気取りのなさ，秩序，礼節，慎みに満ち満ちていたことを。そうした気風が一人の権勢ある大臣の目を引きましたが，それが世の妬み嫉みを招き，見事な滑り出しを見せていたアカデミーの活動が邪魔だてされた経緯を[5]。しかし初代の会員たちの著作によって，アカデミーが精彩を放ったことを。顔ぶれの中に見受けられるのは，マレルブの諧調を受け継いだ高名なるラカン，国語の純粋さを守るための鋭敏きわまりない耳を備えていたヴォージュラ，水際立った名人の手を持ち偉大かつ果敢な気骨を示したコルネイユ，この上なく陽気で軽妙洒脱な魅力を欠かすことがついぞなかったヴォワチュール。揺籃期のアカデミーに

おいて，会員諸氏の学識と鋭さとに美点と徳性とが結び合わされていたことを，会のもつ高貴な出自と威厳が，文芸にまつわる洗練された趣味を兼ね備えていたさまを，この書を繙くことにより我々は知るのであります。ところで，私はいつの間にか身の程を越えてしまったようです。いまは亡き人々のことを語りながらも，ご健在の方々へと話が近づきすぎ，私の賛辞がその方々の謙虚なお気持ちにそぐわぬことになるやもしれませぬ[6]。

このめでたき文芸の刷新が進みゆく間にも，ペリッソン氏は後世に対し，鮮やかな見ものを示しておられることになります。枢機卿リシュリューがそのときヨーロッパの局面を変えつつありました。そして度重なる内戦の残骸を寄せ集め，他のあらゆる権力に勝る権力の，真の土台を築いていたのです。フランスの敵の機密に侵入し，おのが主君の機密に関しては踏み込む隙を与えず，リシュリューはその執務室から外国の宮廷のなかにも深謀遠慮をめぐらせ，近隣諸国が連合せぬように図りました。その行動方針は確固不動，ひとたび約せば違背はありえず，自国政府の名声と同盟国からの信望とによりなしうるところを天下に知らしめたのであります。人間を熟知し，適材適所に配するべくして生まれたリシュリューは人心を掌握，国家のために彼が打ちたてた計画へと人々を邁進させました。こうした強力な手段によって，リシュリューは日々，あらゆるキリスト教国をそのくびきで脅迫していた横柄なハプスブルク家に打撃を与え続けたのであります。同時にまたフランス王国内においても，幾度となく叛旗を翻した異教の徒を屈服させることにより，何にもまして必要とされていた征服がなしとげられました。ついに，これはリシュリュー自身が最も困難と考えていたことでしたが，不安を抱き嫉妬にかられた大貴族たちが自立心を手に集結していた，過激な廷臣群を鎮めました[7]。かくて，時が他の者たちの名前を消し去ったのち，リシュリューの名を強大なものとし，彼が我々凡人から遠ざかるにつれ，彼はよりよい視座を得たのであります。しかしながら，その昼夜を問わぬ骨身を削る労苦の合間に，リシュリューは，雄弁と詩の魅力によって気晴らしをするための，心地よい余暇を持つことを心得ていました。

彼は誕生しつつあったアカデミーをその懐に迎え入れたのです。そして文芸を愛するひとりの教養ある司法官がリシュリューの庇護を受けました[8]。そこへルイ王がさらなる輝きを添えられました[9]。御眼差しをかけ賜うすべてのものへ溢れんばかりに降り注ぐ輝きを。その偉大なる御名に守られ，本会は我らが国語の純粋さと洗練とを求めて止まないのであります。

学識ある賢明な人々が真の規則に達して以来，我々は以前していたほどには，才知と言葉の濫用を行わなくなっております。昔と比べますと我々は，より素朴にして自然な，より簡潔にして力強い，より明確な書き方を選んだのです。我々は思考のあらゆる力を表現するためにでなければ，もはや言葉には執着いたしませんし，我々がそこへ取り組む主題としては，本物の，確固たる，決定的な思考しか容認はしないのです。昔のいかにもこれみよがしの学識は，必要でない限りは姿を見せません。才知さえも隠されます。と申しますのも，技芸の完全無欠というものは飾らぬ自然を，ひたすらありのままに模倣することにあるからであります。従って我々はもはや，眩惑的な空想には才知という名を与えは致しません。才知の名は，規則にかなった正しき才，すべてを意識に変え，常に素朴で優美な自然の後を一歩一歩ついてゆき，ありとあらゆる思考を理性の原理へと導き，真正なものだけを美しいとする才のために残しておくのです。当世においてなお，華美な文体は，それがいかに耳に心地よく快適であろうとも，月並みな様式を上回るほどには向上しえないことに，また真の崇高な様式は，あらゆる借り物の装飾を退けるため，単純なものの中にしか存在しないということに我々は気づいたのであります。

我々はついに悟りました。ラファエロやカラッチ，プッサンのような画家たちが絵を描いたように，文を書かねばならないということを。彼らは驚異的な奇想を探し求めたのでもなければ，筆を自在に操り自分の想像力で見るものを驚嘆せしめんとしたのでもありません。自然に倣って描こうとしたのであります。我々は言論の美というものが建築の美と似通っていることも，また確認し

ました。ゴシック様式の最も大胆で最も手の混んだ作品は，最も優れた作品のうちには入らないのです。ある建築物のなかに，ただひとつの装飾をなすために作られた部分など一個たりともあってはなりません。常に全体の美しい均整を目標とし，ある建築物を支えるのに必要な部分の全てを，装飾に変えるべきなのです。

従いまして，我々は演説からわざとらしい装飾をすべて削除いたします。難解なものを解きほぐすにも，眼前に置きたいものを鮮やかに描き出すにも，ある真実を様々な際立った表現により証明するにも，様々な情熱をかきたてるにも，わざとらしい装飾が役立ちはしないのですから。情熱こそは，聴衆の関心を引き，納得させることができる唯一の原動力であります。と申しますのも，情熱とは言葉の魂であるからです。以上がおよそ60年来，文芸が遂げてきた進歩であります。もしペリッソン氏が著作『アカデミーの歴史』を書き続けることが意のままになる身であったなら，今世紀の栄光のために，この進歩を描かれたことでありましょう[10)]。

光り輝くものすべてを我が身に引きつけておこうと気を配っていた一人の大臣が，ペリッソン氏を文芸の園から引きさらい，事件の中へと投じてしまいました。そのとき，ペリッソン氏は，何たる実直さ，何たる誠実を貫き，恩人に対する何たる不動の謝意を抱き続けたことでしょうか！　信用できる人にしか任せられぬ危険な仕事のなかで，ペリッソン氏は自分が役に立とう，恩人の美点を見出してそれを利用しようと，いちずに思っていたのです。ペリッソン氏のあらゆる美徳を示すために，不幸であること以外に彼に足りないものはありませんでした。果たして，彼は不幸でありました。牢獄の中にあって，その身の潔白と勇気のほどは明らかでした。バスティーユは心地よい独居となり，そこで彼は文芸の花を咲かせたのでした。

幸いなる捕われの身，有益な縛めの鎖が，ついにはこのあまりに独立心の強

い人物を信仰のくびきの下に導きました。獄中のつれづれに，伝統の源の中に，彼は現実をうち負かすに足りるものを探し求めたのです。しかし真理のほうが彼を征服し，ありとあらゆる魅力を身にまとい，その姿を彼に見せました。国王からの評価と親切という栄誉を授けられて，ペリッソン氏は出獄しました。しかし，それよりもはるかに重大であったのは，そのへりくだった心の中では，すでにカトリック教会の子となって，彼が牢から出て来たということでした。ペリッソン氏の回心の誠実さと無私無欲とが，式の挙行を遅らせることになりました。身に備わる才能のゆえに彼に与えられるかもしれない地位，彼ほど徳高くはない別人であれば自ら追い求めたであろう地位によって，己の回心が報われる形になりはしないかと恐れて，ペリッソン氏は回心の式を延期なされたのであります。

その時以来，ペリッソン氏は迷える兄弟たちを立ち帰らせるために，語り，書き，行動し，君主の恩恵を施し続けました。最も重大な結果をもらたす過ちから生じた，喜ばしい成果でありました。と申しますのは，ペリッソン氏の書いた論駁文の中にはっきりと現れている活発さ，忍耐，優しさ，慈悲への鋭敏といったものを身につけるためには，このように闇から光へと移行するなかで辛いものであったすべてのことを，我が身の経験によってまずは感じるという過程が必要だからであります。

我々はペリッソン氏が衰弱しきっていながら，死の前日までなおも祭壇のもとへと身を引きずるようにして歩いていくのを目にしました。彼が言うには，自分の霊名の祝日と回心の記念日を祝うためとのことでした[11]。ああ！　彼の熱誠と勇気のほどに魅せられた我々に，絶え入らんとする声で，聖体に関する大作を書き上げましょうと彼が約束するのを，我々は目の当たりにいたしました[12]。そうです，私は目に涙しつつペリッソン氏の姿を見，語る言葉を耳にいたしました。彼は私に語りました。長い年月，信仰の言葉を糧としてきたカトリック信者が語りうるすべてのことを。それは秘跡を授かろうとの熱意をこめ

て，心の準備をするための言葉でした。死は事実，不意に訪れました。眠りのような見かけでペリッソン氏のもとへ来たのでした。ですがそのとき，真の信徒たる心構えが，彼にはできておりました[13]。

そもそも，ペリッソン氏が従事した，官職のため或は国王から託された宗教問題のための仕事は，彼が文芸の道に打ち込むことを妨げはしませんでした。文芸のためにこそ，彼は世に生まれてきたのですから。まず彼の筆が，当代の治世について書き記すために選ばれました。何という喜びをもって我々はこの歴史の中に一人の君主を仰ぎ見ていることでしょうか。祖父アンリ大王でさえかろうじて着手に踏み切られたにすぎなかったことを，その精神の揺るぎなさによって，若い盛りから成し遂げておられる君主を。ルイ王はフランス人の中でも最も高貴な血を渇望する決闘への激しい情熱の息の根をとめられました[14]。失墜した王権を立て直し，財政を統御し，軍隊を訓練しておられます。片方の御手で数多の強力な都市の城壁を，敵がみな茫然自失するその目の前で足元に打ち倒し，もう一方の御手では善行を施され，科学と文芸とをフランスの安らかな胸のうちに花開かせておられるのです。

さてこれは何としたことでありましょうか。我々の周りで身を震わせている数多の民族が，またも新たな共謀を企てているとは[15]。彼奴らの言うことには，この巨大な王国をたったひとつの陣地のごとくに包囲するためだとか。ルイ王の熱誠によりほとんど根絶やしにされた異端が，息を吹き返し，これほどの力を寄せ集めているのであります。とある大それた君主が，図々しくも解放者の名を詐称し，新教徒どもを結託させ，カトリックの信徒たちを分裂させております[16]。

ルイ王ただひとり，5年もの長きに渡って勝利に次ぐ勝利を収め，この同盟上のいたる所で征服を成し遂げておられます。この同盟は，ルイ王を苦もなく打ち負かし，我らが国土を荒し回るなどと豪語する始末。ひとりルイ王のみが，

気高く優しい心の最も自然なあかしの全てを示しつつ，不面目にも王座から引きずり下ろされた一人の国王の身の裡で，すべての国王の威厳を支えておられます。これらの奇跡を果たして誰が物語ってくれるのでありましょうか。

いったい何者が先の遠征におけるルイ王をあえて描写しようなどと企てるでありましょうか。その征服によって偉大であられる以上に，その忍耐によってさらに偉大であらせられるルイ王を。王がオランダの最も到達しがたい要塞に狙いを定めたところ，出会うのは切り立った岩，これを取り巻く二つの深い川，幾つもの陣地をひとまとめにし，要塞化した難攻不落の陣。その中には守備隊として一個の軍が総掛りで駐屯しており，その外側ではドイツ，イギリス，オランダ，スペインの夥しい軍隊に地表が覆い尽くされている。戦闘においてすべてを危険にさらすことに慣れた指揮官のもと，季節は狂い，真夏に洪水のような雨が降り続く。全自然がルイ王に逆らっているかに見受けられます。と同時に，その勇気によって無敵を誇るフランス艦隊の一部が，多勢に無勢で圧倒され炎上したとの報せ。王はこの逆境に，さようなものは茶飯時であるかのごとく平然と耐える。難局にありながら柔和，平静であられるご様子。予想外の災難の中にあっても，これを切り抜ける策が頭には満ち，片や籠城軍に対して思いやりを示される。王に楯突く一都市を，一撃で粉砕することが可能でありながら，戦災を免れさせてやるためにと，かくまで危険な包囲を延長なさるほどのお情け。大勢の歴戦の兵士たちの数，士官たちの気高い熱情，全軍の命綱たる王自らの勇気，過去に経験した勝利の数々，王が信頼したのはそのいずれでもなかった。もっと高い次元の，たどりつくことの叶わぬ避難所，すなわち神の懐を頼みとなされたのであります。王はついに勝利を収めて帰還なさるも，いと高き主の強い御手の下につつましく目を伏せておられます。神は思うがままに，勝利を授けて下さることもあれば，勝利を取り上げておしまいにもなる。いかなる大勝利にもまして見事なことに，王はご自分への讃辞を禁止とされました。

この謙虚で控えめな偉大さは，人々の讃辞よりも高い次元にあるばかりか，事件そのものを越えた高みにすらあるのだと申せましょう。願わくは，願わくは王が徳のほか何ものにもより頼むことなく，真実にのみ耳を傾け，正義のみを望まれんことを。王が敵たちから知られ（この祈願はヨーロッパの浄福のための万物を内包いたします），他の国々の嫉妬心を癒してのち，諸国の審判者となられんことを。根源的な平和の裡に国民にその善良さのすべてを感じさせ給わんことを。願わくは王が末永く人類の無上の喜びとなり給わんことを，王よりも高きところで神に統治を委ねるためにのみ，人々の上に君臨し給わんことを[17]。

会員の皆様，これこそペリッソン氏がその『歴史』において不滅のものとなさったであろうことがらであります。はるか彼方の世紀にこのことを語り聞かせられるほどに力強い声を持つ人々を，アカデミーは輩出いたしました。しかし極めて広大な題材がいま，皆様の全員に筆をとるよう促しております。それゆえ皆様，競ってお働き下さい。かくも見事な治世を讃えるために。私には本会によせております私の熱誠をこれ以上によくお示しすることはできまいと存じます。まこと本会にふさわしい，祈りをもってなします以上には。

註

1）正式な表題は『1693年3月31日火曜日，アカデミー-フランセーズにおいて弁じられたる，ブルゴーニュ公殿下ならびにアンジュー公殿下の師たるフェヌロン神父の入会演説』と長大であるが，当時の出版物としては特に珍しいほどのものではない。訳出にあたって参照したのは，ガリマール社「プレイアッド叢書」の『フェヌロン著作集』第1巻（FÉNELON, *Œuvres*, éd. Jeacques LE BLUN, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», tome I, 1983）。原註は最少限の訳出にとどめた。むろんフェヌロンによる註ではなく，この版の監修にあたったジャック・ル-ブランのものであるが，これを「原註」としてその幾つかを添えたい。

2）本文の前に「文体の魅力について」との題を添える版もあるが，「文体の魅力」に関す

る論説はむしろ冒頭部分に限られている。

3)「不滅の40人」と称されるアカデミー-フランセーズ会員は終身制であり，会員の死去により欠員が生じると，その席を継承する新会員が選出される。今日までに選出された会員の延べ数は700余名。新会員はまっ先に行う「入会演説」で，多少とも前任者の業績を称賛するのが習慣である。ルイ14世の孫たちの傅育官を務め，『テレマックの冒険』(1699年刊）で知られるフランソワ・ド・サリニャック・ド・ラ・モット=フェヌロン（1651-1715）が継承したのは，財務卿フーケの腹心として悲運を分け合い，自らもバスティーユに幽閉の身でありながら，フーケ救済のために八方手を尽くしたポール・ペリッソン(1624-1693）の席だったのである。アカデミー-フランセーズの公式Webサイト（http://www.academie-francaise.fr/）上の情報によれば，座席番号は34，初代オノラ・ド・ポルシェール-ロージエ（1562-1653）の後継者となったのがペリッソンで，フェヌロンはこの席に就いた3人目の会員に当たる。はるか後の1909年にはレイモン・ポワンカレ（1860-1934）がこの座に登っている。フランスの文相・蔵相・首相を歴任後，大統領を務めた政治家のポワンカレの方で，同名の数学者はその従兄にあたる。

4) ペリッソンはラングドック地方の古都ベズィエス出身，生家は司法官を代々務めたユグノーの旧家（当人は後年カトリックに改宗)。パリでコンラールをはじめ創成期のアカデミー-フランセーズの会員たちとの交友を得，『アカデミーの歴史』を執筆，自身も1953年に会員に選出された。

5) リシュリューが公式にアカデミー-フランセーズを発足させたのは1635年であるが，彼が介入する数年前からヴァランタン・コンラール（1603-1675）の邸で定期的にフランス語純化を目的とする会合が開かれていた。メンバーは会が公式なものとなることを必ずしも歓迎しなかったらしい。

6) フェヌロンが名を挙げた創設期メンバーは全員が既に没していたが，中ではコルネイユが没年1684年であり，このとき没後10年を経過していない。フェヌロンに遅れること2ヶ月足らずでラ・ブリュイエールが新会員に選出され，入会演説でコルネイユとラシーヌを比較，後者を称揚したために一騒動が起きていることを考えれば，フェヌロンが「生存者に話が近づきすぎる」ことを懸念したのもあながち不自然ではなかったものと思われる。なお，ラ・ブリュイエールの入会演説が刊行される際，多くの会員がコルネイユとラシーヌを比較した部分の削除を求めたが，ラシーヌは演説に修正が加えられぬよう画策した。

7) リシュリューが絶対王政の基礎を固めていった様が語られている。フランスの内乱を引き起こした「異教」とはカトリックに対する新教を指しており，「征服」の代表格はイギリスの支援を受けたユグノーたちに対するラ・ロシェルの攻囲。リシュリューがさらに難

敵と見ていたという「嫉妬深い大貴族たち」とは，国王に権力が集中することを快く思わなかった大貴族たちを指すが，実際に彼らはしばしば抵抗を試みた。実質的にリシュリューの後継者となった宰相マザランの時代には，王国を揺るがす「フロンドの乱」へと発展した。

8) 原註に明示されている通り，「教養ある司法官」とは後の大法官ピエール・セギエ（1588-1672）である。

9) 演説の中には「ルイ王」の名がしばしば登場するが，ここのみがルイ13世，他はすべて太陽王ルイ14世を指す。

10) 続く演説の中で示されるように，ペリッソンの運命を「一人の大臣」すなわち財務卿フーケとの出会いが一変させた。初めはペリッソンを筆頭秘書として採用したフーケであったが，やがて彼を腹心として扱うようになる。これが災いし，フーケの失脚（1661年）に際してペリッソンは連座，ともにバスティーユに投獄されてしまう。フーケに恩義を感じていたペリッソンは，彼を救うべく3通の国王宛陳情書を獄中で執筆。後年，ヴォルテールが絶賛した傑作であったが，奏功することはなかった。ペリッソン自身は友人スキュデリー嬢らの奔走により5年後に特赦で出獄。1670年には国王の修史官に任命された。7年後にラシーヌとボワローがペリッソンと入れ替る形で修史官の地位に就く。

11) 原註に「正確には死の前日ではなく，1月25日の聖パウロ回心の祝日」のことと記されている。ペリッソンの名はポール，フランス流の「パウロ」である。

12) 原註にペリッソンの最期が詳しく紹介されている。要点のみ挙げると，ペリッソンは1693年2月7日の真夜中に秘跡を受けることなく没した。その前日にルイ14世がボシュエやラ・シェーズ神父と共にフェヌロンをペリッソンの枕元へ行かせており，このときカトリック教徒としての信仰の揺るぎなさは確認されていた。

13) 終油の秘跡がなかったことは問題にならないとフェヌロンが聖職者としてここで請け合っているのであろう。遠からず死ぬことを悟り，秘跡を受けずに死んでいくことを恐れたペリッソンは，終油の秘跡を受けようと努めたが，まだ臨終までには間があると周囲が判断したのではないか。

14) 有名無実であった決闘の禁止令が徹底されたことを示すものと思われる。「フランス人の中でも最も高貴な血を渇望する決闘への激しい情熱」とは，決闘が貴族たちの間で好んで行なわれた結果，落命する者が後を絶たなかったが，当の貴族たちがなかなか禁令を守ろうとせず，とりわけ若い貴族が血気にはやって決闘を挑む例が多かったことを短く表現しているのであろう。

15) ここに至って，演説の論調がそれまでとはいささか異なったものに変わる。話題がつい前年の「ナミュールの攻囲」（1692年5～6月）に及ぶと，現在形を交えた戦場からの実

況のような言い回しが増える。このルイ 14 世が自ら指揮した遠征に関しては，国王の修史官としてラシーヌも随行し，日々の克明な記録を書き残した。同年のうちに『ナミュール攻囲戦報告書』として出版されている。

16) 原註によれば，英国の「王位簒奪者」に当たるウィリアム 3 世を暗に示している。なお，ウィリアム 3 世は，オランダのウィレム 2 世の子。1677 年メアリ 2 世と結婚，名誉革命（1688 年）によりメアリと共にイギリス王位に即いた。次の段落で「不面目にも王座から引きずり下ろされた一人の国王」と容赦のない描写ながらかろうじて名指しを免れているのは，名誉革命で王位を追われフランスに亡命したジェームズ 2 世。ルイ 14 世にとっては従兄に当る。

17) 聖職者にふさわしい演説の締めくくりと言えよう。追悼演説で音に聞えたボシュエと比較すればフェヌロンの雄弁術が取り上げられる頻度は少ないが，翌々年にはカンブレーの大司教に任じられるフェヌロンであれば，この場の意気軒昂は当然とも思われる。ナミュール攻囲を描写するくだりから既に，国王を誉め称えつつも，すべては神の意のままと明言し，王権に対する神の優位を繰り返し強調している点は注目に値する。

参 考 文 献

Daniel OSTER, *Histoire de l'Académie française,* Paris : Vialetray, 1970.

François LÉOTARD et Patrick WAJSMAN, *Paroles d'Immortels : les plus beaux discours prononcés à l'Académie française,* 2 vols, Paris : Ramsay, 2001.

FÉNELON, *Œuvres*, éd. Jeacques LE BLUN, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», tome I, 1983 ; tome II, 1997.

Margueritte HAILLANT, *Culture et Imagination dans les Œuvres de Fénelon «ad usum Delphini»,* Paris : Les Belles Lettres, 1983.

Michel TERESTCHENKO, *Amour et désespoir : de François de Sales à Fénelon,* Paris : Seuil, 2000.

Alain NIDERST, Delphine DENIS, Myriam MAÎTRE, *Madeleine de Scudéry, Paul Pellison et leurs amis,* Paris : Honoré Champion, 2004.

Jean RACINE, *Œuvres complètes,* éd. Georges FORESTIER, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», tome I (théâtre-poésie), 1999.

Jean RACINE, *Œuvres complètes,* éd. Raymond PICARD, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», tome I (théâtre-poésies), 1950 ; t. II (prose) [1952], remis à jour, 1966.